

「天使」はタイには必要ないか？ ——日本の原作小説『カラフル』とともに タイ映画『Homestay』(2018) 覚書

平松 秀樹

はじめに

タイでは2018年10月から12月にかけて注目すべき4編の映画が上映された。封切りの順に『Homestay』、『Gravity of Love』(Gravity of Love รักแท้..แพ้แรงดึงดูด)、『タイ・バーン ザ・シリーズ2.2』(ไทบ้าน เดอะซีรีส์ 2.2)、『ホー・テオ・テーク 6』(หอแก้วแตก แหกต่อไม่รอแล้วนะ)である。この4作は、現代タイ映画を代表する4つの傾向を奇しくも示しているように思われる。最初の『Homestay』は、新しいタイプの映画として一昨年大ヒットした『バッド・ジーニアス 危険な天才たち』(邦題)の流れを受け継ぐ、スリリングな展開の映画である。次の『Gravity of Love』は、この10年来、タイで隆盛を誇ってきたロマンティックコメディ路線をそのまま受け継いでいて、日本の仙台を舞台としている。「プロムリキット」¹⁾が成立するか否かがテーマであり、映画『タイムライン』(邦題)やタイGlicoポッキーのCMでお馴染みのトゥーイ・ジャリンポンがはじけたヒロインを熱演している。

一方、当局の検閲にかけられ、お坊さんが元恋人の棺の前で泣き喚くシーンがカットされた『タイ・バーン ザ・シリーズ2.2』は、田舎が舞台の人情コメディで、地上波放送の際は伏せ音が随所に挿入されるであろうスラング満載の「B級」映画だが、人気シリーズである。『ホー・テオ・テーク 6』も同じく人気シリーズで、定番のガトゥーイ (おかま、ニューハーフ) たちのドタバタ・ホラーコメディである。これらは、現在タイで人気のある4つのジャンルを代表しているであろう²⁾。

1) 原意は、ブラフマー神によって定められている運命。この場合は「運命的な愛」を意味する。

2) その他の人気ジャンルとして、「真正」アクションや「真正」ホラーがある。アクション俳優第一人者のトニー・ジャーは、近年はタイ映画業界と折り合いが悪いらしく、今年も海外の作品に出ている(出演した『Master Z The Ip Man Legacy』が、2019年1月にタイで一般上映されている)。コメディではないホラー映画は年間を通して常時みられる。

本稿では、この中から『Homestay』を題材としてとりあげ、「正義と忠誠」というテーマともリンクさせて紹介・分析することとする。

1. 映画『Homestay』とBNK48

『Homestay』は一部のファンの間で、とても評判になった映画である。その理由は、今をときめくアイドルグループBNK48のキャプテンであるチャープランが出演していることによる。ある映画館によると、封切りの週は高校生ファンたちがどっと押し寄せたらしい。ただし2週目からはそれほどなくなり、観客数も大幅に減少していき、一般の大きな支持を集めるというまでには至らず、通常期間の打ち切りでロングランにはならなかった³⁾。

BNK48は結成して2年ほどたつが、初年度は笛吹けども踊らず的で、メディアには露出するものの苦戦していた。テレビ番組に出演しても司会者から「なんだこの連中は」といったような扱いをされ、他の男優や女優たちにもほとんど相手にされていない様子であった⁴⁾。ところが昨年に入り、事務所の戦略が功を奏してきたのか人気は急上昇し、お茶の間にまで「おーた」⁵⁾という言葉が浸透し、現首相と「おにぎりダンス」をするまでに至った。ホテルラウンジで歌う

3) セントラルデパート・ラーマ9店にある映画館の係員からの聞きとりによる(2018年11月)。上映期間は各映画館の判断によって異なる。係員によると、当該館では通常3週間、ヒットしたら4週間、大ヒットで2か月目突入、メガヒットだと3か月目もありうるが極めてまれ、とのことである。逆に、人の入り芳しくなければ、3日で打ち切られる。通常木曜日から始まるので、日曜には消えてしまうものもある。たとえば最近では『Norah』(โนราห์, 2018年11月)。タイ南部伝統の舞踊ノーラーをテーマにした芸術性の高い映画でぜひ見たかったが、短期間でバンコクの主要映画館からは消えてしまった。南部ではその後もしばらく上映されている。

4) 本見解は、筆者の定点観測の結果によるもので、あくまで個人的なものであることを断っておく。

5) 「おたく」のタイ語訳。特にBNK48ファンのことを指して使われる場合が多い。その他、コスプレファンなどにも使う。

歌手のレパートリーにも、新しく「恋するフォーチュンクッキー」が加わった⁶⁾。

『Homestay』は、メガヒット映画を連発したGTH社の後身であるGDH559社による作品である。ただし、GDH559社作品は、GTH社が誇ったロマンティックコメディから流れが少しずつ変わりつつある。たとえば大阪アジア映画祭でも好評を得た、札幌が舞台の悲恋物語『1日だけの恋人』(邦題)では、極力コメディ要素が抑えられている⁷⁾。前述『バッド・ジーニアス 危険な天才たち』は全編スリラー調で進んでいくが、コメディだけではなくロマンスの要素もほとんど見られない。今後、当社による映画作品がどの路線に進んでいくかは注目に値する。

それでは、以下、映画『Homestay』の内容分析に入りたい。

2. 内容考察——「天使」は必要か？

『Homestay』は、日本の森絵都原作の『カラフル』(1998年初刊)をもとにした映画である。小説『カラフル』はかなり前にタイ語に翻訳出版されており、近年も別の出版社から再版されている。タイ語翻訳がそれほど読まれた形跡はない。また現在、映画の原作が日本の小説であることは認識していても、それが『カラフル』であることを知っている者は極めて少数である。

映画『Homestay』は、原作小説以上に緊迫感にあふれる作品に仕上がっている。スタートのビルの斜面を転がり落ちそうになる圧倒的な迫力から始まり、ラストに至るまで全編にわたり、見る者は緊張感を強いられる。その点は『バッド・ジーニアス』と似ている。しかし『Homestay』では、国際テストでの大規模カンニングをテーマとした『バッド・ジーニアス』以上に、重苦しい雰囲気が漂っている。魂の移り変わりという元来が重いテーマを扱っているからだという見方もあるが、原作を読む限りは極度に重苦しいといった感じはしない。原作にはどこか「のほほん」とした雰囲気がある。そう感じさせる一つの理由として、名前からしてそうだが、幾分滑稽な天使プラプラの存

在があるであろう。深刻な場面でのプラプラの登場は、場が和む役割を果たしている。

一方、映画では、プラプラは登場しない。天使そのものが登場しないのである。天使プラプラと同じく下界のガイドの役割を担っているのは、正体不明の「監視人」(タイ語でプー・クム ผู้คุม)である。謎の存在たるこの「監視人」は、中年の男性や小学生くらいの少女の形で複数回現れる。不気味な謎の存在として主人公に恐怖を与え、重圧をかけ続ける。原作のプラプラが主人公と夜な夜な花札をして時間をつぶしている姿とは、まるで遠くかけ離れた存在である。プラプラは、見ようによってはおちゃめにも映る。原作で「美形の優男」(6)で「白いふりふりの日傘みたいなのをさしている」(76)⁸⁾天使プラプラに比べると、映画での、土砂降りの雨の中、色つきの傘をもって登場する不気味な美形の少女シーンは、そこだけみるとまるでホラー映画のようである。

タイ映画版での天使プラプラの不在はいかに解釈できるであろうか。ひとつ思いつくのは、原作のプラプラは「頭上に天使の輪は見えない」(6)ものの「背中に翼」(6)があり、漠然とキリスト教的な天使をイメージしていると思われるので、こうした存在がタイ社会には馴染まないのであろうかということである。仏教国タイにおいて、死んでキリスト教的な天使が迎えにくるというのはいかにも似つかわしくない。ちなみに翻訳書では、「テワダー」という、通常仏教的な天人を指す言葉が使用されている。原作小説のように、天使がガイドとしてもういちど修行の機会を与え、それに成功すれば輪廻の世界へめでたく戻してくれる、というのはタイ仏教的にいうとまったくピンとこない話である。「輪廻のサイクルに復帰」(9)することが良いことであるとする原作者の意図は不明であるが、作者にとってのキリスト教のイメージと関係しているのであろうか。タイ仏教の文脈では、整合性はなく、齟齬をきたしてしまう⁹⁾。

8) 引用は文春文庫版『カラフル』(2007年)より。以下ページ数のみ記す。

9) どちらかといえば、悪い死に方をして往生できない魂なので、「悪霊」になるのを阻止するために、もう一度現世で修行して、成功すれば無事に往生できるとする考えであれば、解釈しやすいであろう。「おまえはよくない死に方をしたので、他の人の体をかりて(Homestay)、もう一回やりなおしてこい、そうしたら往生させてやる」といった風に捉えるのなら、もう少し整合性が出てくる。

6) 定番としては、日本人が客にいたるのがわかれば「スバル」を日本語で歌ってくれる。

7) 監督は本作を「ロマンティック・ドラマ」とであると語っていた(2017年3月の大阪アジア映画祭での上映後の質疑応答での筆者の質問への回答として)。

仏教では、輪廻の世界から「解脱」して、二度この苦しみを満たした六道世界に戻って来ないというのが、(とりわけ出家者にとって) 最高の理想であり究極の目標なのである。こうした最高の目標に達しなくても、すくなくとも六道の最上界である天人界へ生まれかわり、天人・天女として過ごしたいというのが在家者一般の願いである。天人界ではない苦しみにみちた他の輪廻世界へ戻してくれるというのは、極めてありがたない話である。以上のことを制作者側が考えたどうかかわからないが、映画では輪廻というのは強いテーマになっていないようだ。

少し別の視覚から考えてみたい。たとえば、前世で夫婦関係がうまくいかず、憎しみあったまま死んだため、今生でも再度つがいになって苦しまなければならないカップルがいる。前世で問題を解決できなかったので、今生で再び修行の機会を与えられ、もし互いに苦しみあう関係の原因をクリアできれば来世ではもう出会わなくて済むのだ、といった考えであればタイでも十分に理解可能である。日本語でいえば「腐れ縁」といった感じであろう。タイ語での本来の意味での「クー・カム」(業のカップル)¹⁰⁾である。

天使プラプラとともに、原作と大きくかけ離れたもう一つのキャラクターは、ヒロインひろかである(準ヒロインとも考えられる)。原作のひろかは後輩であり、「フルーツみたいな声」(45)の持ち主で「少しぼっちゃりした茶髪の女の子」(45)であり、「もっと大人っぽいスカした女だと思ってたのに、声もしゃべりかたも子供っぽい」(46)中学2年生である。しかしながら、幼く純なもの、中年男性と援助交際(パパ活)し、さらに、学校の男子にまでお金を貢がせているとの噂がある小悪魔的な存在である。対して、映画でのヒロインのパーイは主人公の憧れの先輩であり、優秀で清楚な魅力のヒロインである。学校では特待クラス生であり、国際科学オリンピックに出場し活躍を期待される超優等生である。原作のひろかとの共通性は「ぽよんと厚みのある唇」(47)くらいしか見受けられない。

このパーイ役をこなすのは、何事にもまじめで積極的に取り組む優等生のキャラが、タイのお茶の間にまで定着しているBNK48キャプテンのチャープラーン

である。BNK48「おーた」ではない人からも、キャラがぴったりという意見が圧倒的多数であり、見事なほまり役となっている。チャープラーンのイメージに合わせるために原作のひろかのキャラを変えたのか、それとも映画脚本としてのヒロインのイメージが先にあって、そのキャラに合う女優を探したところ彼女がぴったりであったのか、機会があれば監督に質問してみたい。

タイの有名大学¹¹⁾ マヒドン大学の現役学生であるチャープラーンは、既に述べたように、勤勉で何事にも積極的というイメージがファン層以外にも浸透している。真実と異なるイメージ戦略としての可能性が疑われることはなく、今のところ、この優等生イメージは不動のものとなっている。仮に事務所のイメージ戦略であるとすれば、大成功であろう。彼女は、BNK48加入以前は、ジャパン・フェスタなどでの、オンラインゲームブースでのコスプレイヤーとして、限定された一部の人々の間で既に有名であったらしい¹²⁾。

3. 「正義と忠誠」の観点から

原作小説では、主人公はひろかが援助交際しているのを知りショックを受ける。一方、映画のヒロインは、国際科学オリンピックを目指して教師に特別指導を受ける過程で、他の指導まで許容することになる。どこまでの関係かははっきりとした説明はないものの、放課後の特別教室でふとももを触られるシーンの描写がみられるので、性的関係を余儀なくされている暗示と読み取れる。中年男性との援助交際が、学校の指導教師との関係に移し替えられていることを、こうした問題が日本で起こりやすい問題とタイで生じやすい問題の差異の表出であると考えるのは深読みし過ぎであろうか。いい成績を出す代償として生徒に性的行為を要求する教員の逮捕ニュースが、以前話題になったこともあった。いずれにしても、チャープラーン演じる優等生ヒロインが、勉強以外の理由で中年男性と関係をもつ設定というのは難しい。原作でひろかは、いい服が買いたいために援助交際するが、映画で

10) 著名な小説・映画のタイトル「クー・カム」は本来の意味と離れて、その内容から運命の二人などとロマンティックな面が強調されて捉えられている。

11) ちなみに、タイの著名な芸能人や俳優も、タイで難関といわれる有名大学の出身者が多い。

12) コスプレファンの某大学生グループからの聞き取りによる(2019年1月)。ここでは大学名は伏せておくこととする。

のパーイは国際科学オリンピックで金メダルを取り、そして親を喜ばせるために、教師との関係を許容するのである。

タイの映画の主人公は、ヒロインのそうした不義が絶対に許せない。日本の原作での主人公の「まあいいか」的なのは、大いに異なる。同時に、彼にとってもうひとつショックで許せない行為がある。母親の不貞行為である。ただしこちらの方は、フラメンコ教室講師との不倫を知り「汚らしい中年女」(60)と罵る日本の小説の方が、逆に、絶対に許せない感は強い。原作では、執拗に母(厳密に言えば、途中までは、身体にホームステイしている人物の母)の不倫にこだわり、彼女が懺悔した後でも、まるで、突き放したような姿勢をとりつづけるのである。「いちおう反省はしているらしいが、本気で反省してるように見えないところが、彼女の痛いところだ」(204)などと述懐する。

タイ社会では、誤解やわだかまりが取れた後に、そのような言葉は決して母に対して向けないであろう。事実、映画では、原作と同様に母の不徳が許せないものの、それなりの理由があり、やむを得ない事情であったことを理解して、許しているように思われる。いやそれ以上に、自分の勘違いや早とちりを反省し、改心さえしているようにもとれる¹³⁾。この最後の転向で、母への忠誠に戻り、母の子として「ありがたく」生きていく決意にいたる度合いは、日本の原作と比してタイ映画の方が遙かに強いことが見て取れる。

最終的には、母¹⁴⁾への感謝、タイ社会での最も大切な価値観である親への「ガタンユー」(恩)¹⁵⁾のようなものを示しているのである。本編は途中までは、そうした従来の「ガタンユー」の価値観を裏切るような新趣向の作品かと思わせるような展開であった。しかし、広くタイ映画にも共有される価値観である「ガタンユー」という金剛石が、ここでも最後に光を放つのである。タイ映画で、親を完全否定するような作品を探すのは難しい。親の方が悪いとわかっていても、子

供に対する親の「悪」は免罪される、あるいは子供の犠牲により「贖罪」されてしまうのが、映画やテレビドラマの一般的特徴である。原作『カラフル』と映画『Homestay』を重ねてみると、日本とタイの親に対するスタンスの相違が微妙な具合に透けて見えて興味深い。

4. その他の着目点

擱筆の前に、筆者が着目したその他の点をメモランダム的に記しておきたい。

- 既に述べたように、『Homestay』は、全編を通してスリリングな進行で、見る者に最後まで緊張を強いる仕組みだが、肝要な場面では、バツハの「G線上のアリア」が挿入されている。この曲が流れているシーンだけは少し緊張がほぐれ、強度のスリルという束縛から離れることができた。これが筆者の個人的な体験なのか、タイの他の観客の人たちの脳波にも同様のインパクトを与えているのか興味がある。また、別の視点から考察すれば、バツハの「G線上のアリア」が、日本の原作における「のほほん」系の天使プラプラの登場シーンと同種の、緊張からの解放の効果を、期せずしてもたらしものとなっているともいえるであろう。いずれにせよ、タイ映画においてバツハの「G線上のアリア」が流れるのは珍しいのではなかろうか。この曲は、エンディング・ロールにも使われていた。
- 原作小説の到達点である『藪の中』的な「小林家のイメージが少しずつ色合いを変えていく」(178)「角度次第ではどんな色だって見えてくる」(179)、あるいは、「人は自分でも気づかないところで、だれかを救ったり苦しめたりしている」(187)、「この世があまりにもカラフルだから、ぼくらはいつも迷っている」(187)といった事柄は、タイでは自明なことなのでわざわざ強調する必要がないためか、あるいはタイ映画のテーマとしては陳腐なものに陥ってしまう危険を回避するためか、『Homestay』では原作ほど表立ったテーマにはなっていないように思われる。
- 「今この時代に早乙女くんと出会えてよかった」(218)といえるほど、主人公がこころを許せる唯一

13) 映画館で1回本編を見ただけなので、誤認があるかもしれない。DVDの発売後、再確認したい。

14) 母親役をこなすのは、映画『セブン・サムシング』(邦題)で中年の女性ヒロインを演じた女優である。『セブン・サムシング』では、平凡な外見にもかかわらず、韓流ポップスターのニックン(2PM) 演じる10歳以上も年下の青年から言い寄られるという、違和感ありありの設定かつキャスティングであった。

15) 「ガタンユー」は、上座部仏教の重要概念でタイ社会の根幹をなす価値観となっている。詳しくは平松2018を参照されたい。

の男子友達の存在が、映画でははっきりしない、あるいは描かれていなかったような気がする。

- 主人公およびもう一人のヒロインといえる唱子が犠牲になった「いじめ」の問題は、映画では薄れていた感じがする。
- 原作だと、読んでいる途中で、結末（ホームステイ先が実は自分自身）が想像できる展開であるが、映画は最後でどんでん返しの展開となっている。
- 全ての誤解が解けたあとも、原作では家族をあくまでも長期のホームステイ先として過ごす決意をするのに対し、映画では本当の「家族に戻る」ことが強調されている。
- 「最終的にぼくを救った唱子の存在」(241)をはじめ、「支えてくれた人たち」(245)みんなに感謝的な終わり方の日本の原作に対して、タイの映画は家族とくに親との和解が印象に残る仕上がりとなっているのではなかろうか。

参考文献

平松秀樹 (2018) 「タイ映画・テレビドラマ・CM・MV にみる報恩の規範——美徳か抑圧か『親孝行』という名のもとに」 福岡まどか・福岡正太編 『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』 スタイルノート、pp. 56-76。

森絵都 (2007) 『カラフル』 文芸春秋社 (単行本初刊は1998年、理論社)。

วิษณุ คุ้มรุ่งโรจน์ (ウィヤダー・カワグチ) 訳 (発行年日の日付なし) 『Colorful』 Jamsai出版 (森絵都『カラフル』のタイ語訳)。

映画

凡例：①原題、②監督、③公開(制作)年、④制作国、⑤使用言語、⑥日本での公開

- ①Homestay、②パークプーム・ウォンプーム(Parkpoom Wongpoom/ภาณุ วังภูมิ)、③2018年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開(2019年1月15日現在)